

A 会員の動向

調査は平成14年に最近3年間の記入を求めたが、3年間全ての期間について回答があったものは少なく、それぞれまちまちであった。表5は、それぞれの年度について回答のあった学術研究団体の資料によって会員総数、女性会員数および女性会員比率をみたものである。(従って年度ごとに含まれる学術研究団体は異なる)。

表5 平成11年度から平成14年度までの学術研究団体会員総数、会員中の女性比率(部の平均)

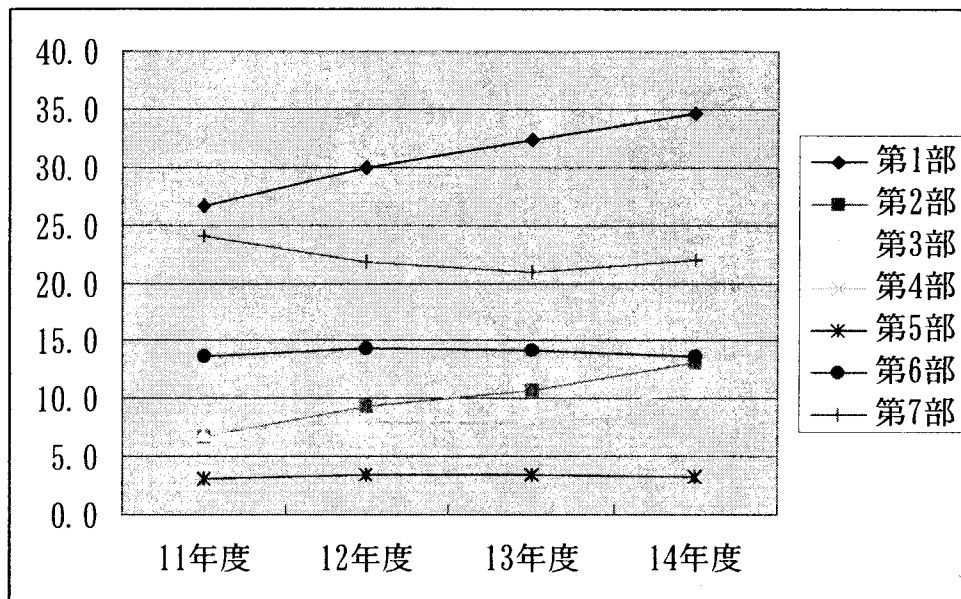
	平成11年度			平成12年度		
	会員総数	女性会員数	会員中女性比	会員総数	女性会員数	会員中女性比
第1部	119,509	31,827	26.6	223,538	66,912	29.9
第2部	9,157	611	6.7	20,111	1,890	9.4
第3部	33,296	2,294	6.9	45,086	3,529	7.8
第4部	47,628	3,425	7.2	87,428	6,982	8.0
第5部	55,581	1,718	3.1	273,669	9,442	3.5
第6部	34,769	4,758	13.7	111,860	16,018	14.3
第7部	325,078	78,402	24.1	821,283	179,690	21.9

	平成13年度			平成14年度		
	会員総数	女性会員数	会員中女性比	会員総数	女性会員数	会員中女性比
第1部	265,096	85,953	32.4	126,556	43,926	34.7
第2部	23,429	2,504	10.7	15,778	2,067	13.1
第3部	48,512	4,093	8.4	16,639	1,785	10.7
第4部	127,761	10,067	7.9	60,866	5,439	8.9
第5部	288,956	10,199	3.5	337,245	10,973	3.3
第6部	124,239	17,631	14.2	99,237	13,536	13.6
第7部	1010618	212509	21.0	605,539	133,356	22.0

この資料をもとに、各部の平成11年度から平成14年度までの女性会員比率の消長を示したのが図1である。

ここから判ることは、以下の諸点である。

- * 部によって女性会員比率が異なる。概して、第一部が高く、かつここ4年間で比率は高くなっている。
- * 勿論、部内での差もある。とりわけ全体としては低い第7部でも、看護関連の学会での女性比率は高い。



次に、11年度から13年度にかけて女性会員比率の変化をみるために、3年間に女性会員比率の増加によって全学術団体を序列化し、女性会員比率の著しい学術研究団体 1～7 部通して上位 20 団体をあげると、以下のとおりである。

表6 平成11年度から平成13年度にかけて女性会員比率が増加した上位20団体

順位	部	団体名称	13年会員総数	13年会員中 女性比率	11年会員中 女性比率	13-11年 女性会員 比率差
1	第3部	日本危機管理学会	167	19.8	1.5	18.3
2	第1部	川端文学研究会	125	40.8	28.3	12.5
3	第1部	日本アジア協会	260	41.9	30.6	11.4
4	第1部	日本語ジェンダー学 会	120	75.8	65.9	10.0
5	第1部	日本音楽療法学会	5146	91.1	82.6	8.5
6	第4部	日本進化学会	738	13.0	4.7	8.3
7	第4部	情報文化学会	376	10.9	2.6	8.3
8	第1部	日本催眠医学心理 学会	429	16.3	8.1	8.2
9	第7部	日本良導絡自律神経 学会	1095	14.2	6.7	7.4
10	第1部	(社) 日本時事英語学会	570	28.1	21.4	6.7
11	第1部	日本演劇学会	643	30.6	24.3	6.4
12	第1部	留学生教育学会	167	47.9	42.1	5.8
13	第1部	日本現象学会	470	10.4	4.8	5.7
14	第6部	日本獣医皮膚科学 会	580	22.4	17.0	5.4
15	第6部	日本シルク学会	293	17.4	12.2	5.2
16	第1部	日本コミュニケーション学 会	469	48.6	43.5	5.1
17	第1部	国際アジア文化学会	185	29.7	24.6	5.1
18	第1部	説話・伝承学会	356	33.4	28.4	5.0
19	第1部	六朝学術学会	121	17.4	12.9	4.4
20	第3部	ラテン・アメリカ政経 学会	124	18.5	14.2	4.4